

もう一つの甲子園

支刈誠也

忘れられたヒーローたち



もう一つの甲子園 もくじ

目次

古びたニュー・ボール	5
土づくりの鉄人	15
転落事故	31
和中のエース	49
野球部OB会	77
甲子園の縁	97
戦没野球人	122
もう一つの甲子園	141
幻の優勝	152
勝利の女神	175
魔の一球	194
見逃しの三振	216
逆転サヨナラ・ホームラン	229

古びたニュー・ボール

独り暮らしの西川大輔の母、テル子が目に見えて衰えてきたのは、大輔が、兼原バイオファームを定年退職した後、大阪にある財団法人新産業創出援助センターでヴォランティアを始めて三年ほど経ったころだった。

独りでは危ないと考えた大輔が、三十年ほど前に買い求めた神戸の須磨にあるマンションへ引き取ろうとしたが、母は、大輔が家をでてから四十年以上も独りで住んでいる和歌山市郊外にある古い百姓屋を離れるのを拒み、独り暮らしを続けた。

ところが、その母は、今年の秋になって、自分から「近くにある老人ホームに入居する」と言い出した。

これで孤独死という不慮の事故は回避できたと、ほっとしていると、母は、手続きを終えた直後に誤嚥性肺炎を患い、老人ホームに入居することもなく、入院先の病院で他界した。

西川家は、先祖代々、JR和歌山線で和歌山駅から西に五駅行ったところにある紀伊小倉一帯に農地を持つ豪農だった。

先の大戦末期、跡取り息子であった大輔の父、誠太郎が戦死した後、一人息子を失い気落ちした誠

太郎の父母が次々に病に斃れ、後を追ったため、嫁のテル子が跡を継いでいたが、農地改革で大部分の土地を失ったうえに、戦後のどさくさを生き抜くために、残された田畑を切り売りした結果、現在残っているのは、納屋と蔵がついた茅葺きの大きな百姓家だけだ。

テル子が、西川家最後の砦とも言うべきこの家を手放さずに、女手一つで大輔を大学院まで行かせることができたのは、昭和二十四年の学制改革で、和歌山師範学校と和歌山青年師範学校、そして和歌山経済専門学校を併せ、和歌山大学ができたときに作られた大学図書館で司書として働いてきたからだ。

大輔は残された家に行って驚いた。母が六十年以上も勝手気ままに使っていた家は、遺産、と言ってもまったく価値のない物で一杯だったのだ。

綺麗好きな母だったから、一見、家の中は整然としていた。だが、戸棚と納戸は、大きさに順に重ねられた発砲スチレンの容器、きちんと畳まれた包装紙、紙袋、ポリ袋などで溢れ、押入れは手紙や書類でいっぱい。タンスは、古着で満杯、蔵は、物好きな骨董屋でも、絶対引き取らないと思われる、アンティークには程遠い、単に古いだけのガラクタで足の踏み場もないありさまだった。

「欲しがりません 勝つまでは」という標語が掲げられた、物のない時代に育ったテル子は、物を捨てることができなかつたのだ。

母の葬儀をすませた大輔の仕事は、ガラクタを一つ一つ仕分けし、無用のものを裏庭の隅に掘った大きな穴で燃やすことだった。

「整理とは捨てること」と思っている大輔は、戸棚と納戸にあった物をリサイクルする物とその外に仕分けた後、タンスに手をつけた。

あたかもタイム・カプセルを開けたかのように、懐かしいものが次々とでてきた。自分が着ていたと思われる赤ん坊の肌着に始まり、小学校時代に身につけていたもの、母が一度だけ小学校の父兄参観日に来てくれたときに着ていたエンジ色のスーツなどが、次から次へと現れたが、父の物は一つもない。

——父は満州で戦死したと聞いている。さすがの母も、戦前のものは捨てたか、あるいは、金に困って売り払ったようだ。

などと思いつつながら押入れの手紙と書類の山に手をつけた。

そこもタンスと同じでタイム・カプセルの世界だったが、ここにも父のものは、手紙どころか一葉の写真もない。

小学生のころ、大輔は、母から聞かされていた父……和歌山中学から慶応大学に進み、卒業後、軍隊に取られ満州で戦死……と実際の父の間に違いがありそうなのに気づいていた。

クラスには戦争で父を失った同級生が何人かいた。彼らは例外なく、彼らの母や家族から戦死した父のことを詳しく聞かされていたのに比べ、ほとんど何も知らされていなかった大輔は、何か特別な訳がありそうなことに気付いていた。だが、幼いころから人の気持ちや付度するに長けていた大輔は、女手一つで自分を育ててくれた母に、それを訊かないのが親孝行だと自分に言い聞かせてきた。

しかし、その疑惑は、社会人になって八年目、ボストンで開かれた世界生物化学会にオブザーヴァ

ーとして出席することになり、パスポートを申請するために取り寄せた戸籍謄本を見たときに確信となった。

父母は昭和十八年十月に婚姻届を提出し、父は、その翌年、昭和十九年五月、二十二歳で戦死していたのだ。

——戦前の学制は、小学校が六年、中学が五年、大学予科が二年、本科が三年やったから、大学は二十三歳で卒業なのに、父は、二十二歳で戦死している。ということは、学徒出陣での戦死のはずや。……しかし、母から学徒出陣のことは聞いていない。やっぱり、何かを隠しているんや。

——と思ったが、大輔は、この時も、あえてその疑問を母に突きつけなかった。誰にも立ち入ることが許されていない母の聖域のような感じがしたからだ。

人様に差し上げるのも憚れる古着とは名ばかりのポロを火にくべながら、三十年ほど前に抱いた疑問に思いを馳せていて、大学時代、同じクラスの女性と二人だけで喫茶店に行った話をしたときに、母から「学生の分際で女性と付き合うとは何ごとや」と、すさまじい剣幕で叱られたのを思いだした。

——父が学徒出陣だとすると、二人は学生結婚だったはずや。なのに、母は学生結婚の「が」も言ったことがない。……学生の身分で見合い結婚するはずはないから、二人は恋愛結婚やったはずや。それなのに、俺が、本気で付き合うかどうかともわからない同級生とお茶しただけで、あの権幕やった。二人に何があったんやろう。……いくら、学生の男女交際は好ましくないとされてきた戦時中だと言っても、二人は、きちんと結婚している。……待てよ、俺は、結婚届の

五か月後、昭和十九年三月に生まれている。ということ、二人は今で言う「できちゃった婚」やったんや。しかし、そんなことは、母が墓場まで持っていくような秘密ではありえない。

出征して行く兵士は『祝 出征』という襷をかけて写真を撮ったり、軍服姿で家族と一緒に写真を撮ったりしてするのが一般だった。しかし、大輔の父の写真は、応接間の飾り棚の上に、母の祖父母、父の祖父母の写真などの背後に、あたかも隠すように置かれていた、慶応独特のアンパン型の学帽を被った学生服姿のものしか残されていない。日記どころか手紙も残されていない。

——恋愛の末の結婚やったら手紙とか写真が山ほど残っているはずなのに、何もない。……母は父を憎んでいたんやろうか。……そうやとしたら、母が、西川の家を守ってきたことが説明できない。

父母のことを、ああでもない、こうでもないと考えながら、仕分けを続けているうちに十日が過ぎ、ガラクタの山が三分の一ほどになったとき、母が女学校時代に使っていたと思われる古い行李の底から古びた硬球が一個でてきた。

——母の行李に硬球？

「唐突に」と表現する以外に方法がないほど不意に、そして不自然に現れたボールを手を取った。赤い縫い目は色が褪せ、皮は薄茶色を呈し、ところどころに手垢のようなものがついているが、それほど使われた形跡はない。ニュー・ボールと言っているいい状態だ。

——サイン・ボールかな？

と、思っただけだと、そこには「KEIO」と黒いスタンプが押されている。

——父は、慶応の野球選手やったんやろうか。しかし、母は、そんなことは一言も言っていないかった。……とすると、父が同級生の誰かに貰ったものかもしれない。……いや、父の形見らしものは、これしか残っていない。誰かに貰ったものを後生大事にしまっておくのはおかしい。……ひよつとしたら、母にとつて、これは捨てるに捨てられないもの。二人の思い出がこれに詰まっているのかもしれない。……それにしても学生結婚した夫の思い出がボール一個というのは理解できない。……そうや。学徒出陣と言えば、「最後の早慶戦」は、たしか昭和十八年の十月。婚姻届と同じ月や。母は父と一緒にあれを見に行つたんかもしれん。……誰かに訊いてみよう。

——西川家は代々豪農だった割に親族が少ない。まして、母と父のこととなると、知っている可能性があるのは、母方の叔父である母と三つ違いの弟、昭夫と分家の総領、光太郎ぐらいのものだ。

——一番確実だと思われる叔父は、二十年ほど前から、奥さんの生まれ故郷である薩摩半島にある喜入町に住んでいる。気軽に行ける距離ではないし、電話で訊くようなことではない。

——大輔は、薩摩半島に赴く前に、紀ノ川を挟んで和歌山市の北に位置する岩出市にある分家を訪れることにした。

——二〇〇九年の年が押し迫った十二月のある日、大輔は、母が遺した宝飾類のいくつかを手に分家を訪れた。

——父の誠太郎より十年ほど遅く生まれた分家の家長、光太郎と母の葬儀以前に会ったのは、祖父母の

三十三回忌のときだった。

——考えてみれば、光太郎さんとは三十三回忌以来のことやった。母は親類縁者と距離を置いて暮らしていたんや。何らかの事情があったにしろ普通やない。いや、本家を守る身としては、おかしいと言わなきゃ。……親類縁者の口から父のことが俺に伝わるのを警戒していたと考えるのが自然や。

分家までの道すがら、そんなことを考えていた大輔は、光太郎に母の形見を手渡すのもそこそこに、疑問をぶっつけた。

「光太郎さん。私は、母から父のことを何も聞いていないんです」

「誠太郎さんか。……わしは誠太郎さんより十ほど下やから、ほとんど接点はなかった」

「母からは、父は和歌山中学から慶応大学に進み、卒業後、軍隊に取られ満州で戦死と聞いているだけですよ」

「わしもそれぐらいしか知らん。……しかし、何でまた、今ごろ誠太郎さんのことを……」

光太郎が眉をひそめた。

「はい。母は、物を捨てられない性格だったようで、戦前からの物を含め、家の中はガラクタの山でした」

「物のない時代に育った人によくあることや」

「そのとおりやと思います。ところが、父に関する物は学生服姿の写真が一枚残されているだけで、いくら物がなかった時代のこととは言え、おかしいと思っていれば、母の古行李からこれが出てきました」

「……」

光太郎は、大輔が取りだした硬球に驚いた様子も示さず、無言でそれを受けとった。

「父は野球の選手やったんですか」

「和中（和歌山中学）で野球をやっていた」

「和中で野球ですか？ 母はそんなことは一言も言っていない」

「誠太郎さんは、二年になってすぐの四月にあった春の選抜に補欠ででた後、エースになったんやけど、同学年の海草中学の嶋清一に、ことごとく甲子園への夢を破られた」

「としたら、慶応でも野球をやっていたんですね」

「和中の先輩に引っ張られて慶応に進んだようや」

「しかし、どうして母は、それを教えてくれなかつたんでしょうか」

「言いそびれただけやないかな」

「私の同級生に何人か父を戦争で亡くした人がいましたが、みんな詳しく聞かされていました」

「一緒に暮らしたのは僅かな期間やったから、話すことがなかつたんやろ」

何を訊いても、母を庇っているような応えしか返ってこない。質問を変えることにした。

「父と母は学生結婚だったというのをご存知でしょ」

「大恋愛だったという話や。……ああ、本家であった結婚式は覚えている。終戦の前の年やった。あのころにしては豪華な結婚式やった」

「大恋愛の末の豪華な結婚式だったのに、母が残したのは、学生服姿の写真一枚とこのボール一個だけです。おかしいと思いませんか？」

「おかしいと言われても……人それぞれやから……」

過去の思い出にどっぷり浸かって暮らす人、思い出と完全に縁を切って暮らす人、人それぞれなのは間違いない。しかし、それにしても応えが素っ気なさ過ぎる。

「ああ。それから、父は、学徒動員だったはずです。そのあたりはご存知ですか」

「うん。満州で戦死した」

「そうですか。……ところで、このボールですが、見てのとおり、これは慶応のボールです。父は最後の早慶戦にでたんでしょうか」

「最後の早慶戦？ いや、そういう話は聞いたことがない。誠太郎さんが東京に出たんは、わしが小学校、いや、国民学校に入る前やったし、戦死したんは、中学に入る前やった。大ちゃんにはすまないけど、誠太郎さんのことは、ほとんど知らないんや。……そうや。テル子さんの弟さんに訊いてみたらどないや。あの人は東京師範に行きはったから、慶応時代の誠太郎さんを知っているはずや」

分家の家を辞し、愛車、カムのりのハンドルを握っていた大輔は、

——十才違いということ、父が和中のエースやったころには、まだ六歳か七歳、何も知らないのは無理もないか……。

などと考えていて、光太郎が硬球を見て驚かなかったどころか、怪訝そうな顔もしなかったのを思い出した。

——ひよっとしたら、光太郎さんがこの硬球を見たのは、今日が初めてではなかったのかも……。そういえば、俺が、いきなり父のことを訊いたら、光太郎さんは眉をひそめた。俺は、あれを突

然の話に接しての戸惑い顔やと思ったんやけど、本当は、嫌な話題になったということやったんかも……待てよ。「満州で戦死」と言った光太郎さんの目が踊っていた。あれは、何かを隠している目や。父のことについて、母から口止めされているに違いない。……このボールの背後にある秘密を追いかけてみよう。

大輔は、助手席に置いた布製のバックの上から硬球を握りしめていた。

土づくりの鉄人

二〇一〇年、元日、朝。

甲子園球場に向かって歩いていている青山慶太をプラタナスの枯葉が乾いた音を立てて追い越していった。

枯葉が飛んでいった方角に甲子園球場がある。

六甲おろしの冷たさに、思わずオーバーの襟元を合わせた青山が、目の前を横切っている阪神高速三号神戸線の高架の後方に視線を向けると、背の高いクレーンが四基ほど、思い思いの方向に腕を伸ばし、突っ立っている。

甲子園球場では、二〇〇七年十月に始まったオフシーズンから三期に渡り大改修が行われている。

青山慶太は、高野連（高校野球連盟）の審判員を二十五年続けた後、後進に道を譲り、連盟の評議員を勤めて九年になる。

元日の朝、家族で芦屋神社に初詣をした後、野球人としての無事を祈るために甲子園球場を訪れるのを習慣にし始めたのは、「世紀の誤審」と呼ばれた事件の当事者になった翌年からだ。

六甲おろしに背中を押されながら高速道路を潜ったところが三塁側だ。

葛が絡みついた壁の手前五米ほどのところに、工事用の金網が張り巡らされている。金網沿いに反時計周りに進み、警備員の詰所がある正面玄関にでたところに工事用のゲートがあったが、太い鎖で閉ざされ、大きな南京錠がかかっている。

——いつもなら元日でも警備員が詰めているんだけど、今年はいないようだ。

三塁側から外野を経て一塁側まで歩いてみたが、人気はない。網の隙間から入り込もうと思っても、網は新しく、猫の子が通り抜けられるほどの穴も開いていない。

——入るのは無理だ。……三箇日があれば工事は始まるだろう。そのときを狙って来ることにしよう。

球場に入るのを諦め、高速の下にある信号に向かって歩いてみると、向こうから見かけた顔がやってくる。

——金山さんだ。

金山孝雄。甲子園のグラウンド管理を任されている阪神園芸社の運動施設課長だ。十六人ほどのグラウンド・キーパーを束ねている。

高校野球の審判員とグラウンド・キーパーは、ヴォランティアと職業の違いこそあれ、グラウンドで展開されるゲームの裏方という点で同じだ。うまくやって当たり前、失敗したら非難ごうごうの世界にいるのも同じだし、「グラウンドの主人公である選手たちに良いゲームをしてもらいた」という気持ちなくしては勤まらない仕事であるのも同じだから、互いに通じ合うものがあるのはもちろん、助け合うことも多い。

たとえば、雨中のゲームとなった場合、コールド・ゲーム、あるいは、再試合を宣言するのは審判

員の仕事だが、続行不能と判断するには、グラウンド・キーパーの意見は欠かせない。

審判員が試合の途中でトイレに行くことができるのは、五回表が始まる前のグラウンド整備中の短い時間しかないから、腹の調子が優れないときには、グラウンド・キーパーに事情を説明し、いつもより長めに整備をしてもらうこともある。

青山が手を挙げると、それに気づいた金山が、軽く頭を下げながら歩み寄ってきた。

「明けましておめでとうございます。今年も宜しくおねがいます」を言い交わし、「金山さん。新年早々お仕事ですか。ご苦労ですな」

と言うと、

「ええ。まあ。これだけ乾いた風が吹くと、内野の土が飛ばされますんで、様子を見にきたんですわ」が、返ってきた。まさに渡りに船だ。

「それは、ちょうどよかった。いつもの警備員がいないので中に入れなかったんです」

青山の甲子園元日初詣は、グラウンド・キーパーの誰もが知るところだ。

「そうですね。今年は内装工事が主なので建設会社が警備を担当しています。大会社やから三箇日は休みなのでしよう。私をご案内しましょう」

「ありがたい。……ところで、内野の土は、今から全部入れ替えるんですよ。少しぐらい土が飛んでも差し支えないのでは……」

一月から二月に行われる土の入れ替えは、甲子園の年中行事の一つだ。

「それは、そうですねが、今日のように六甲おろしが強いと土埃がご近所の迷惑になるんですわ。暮れ

に植えた芝生の様子見もありますし。……ところで青山さんも、毎年ご苦労様ですね」

『阪神タイガースの歌』で有名になった六甲おろしは、冬の寒風というイメージが強いが、古来、季節を選ばずに六甲山頂より吹き降りる突風を言い、春には本州南岸を進む低気圧による東風が大阪平野から六甲山地に当たり、強い北寄りの東風となり、秋と冬には発達した低気圧がもたらす北風となる。

「審判員を辞めて、もう九年ですが、すっかり習い性になりましたね。元日にここに来て、野球を司る神様にお祈りしないと一年が始まったような気がしないんです。……ところであの神棚はそのまま残されるんでしょうな」

グラウンド・キーパーの控え室にある神棚のことだ。

世紀の誤審事件の後、「土作りの鉄人」と呼ばれていた藤田大五郎からその存在を教えてもらった青山は、それ以降、元旦と試合前はもちろん、ことあるごとに手を合わせることにしているが、グラウンド・キーパー以外、その存在を知る人は少ない。

「はい。球場ができて以来のものやから、何よりも先に新しい控え室に移してもらいました」

金山の手引で、グラウンド・キーパーの控え室に入り、作法どおり二拝・二拍・一拝で神棚を拝んだ後、バックネット裏に出た。

スタンドは工事の真つ最中で雑然としている。木切れを拾い、打ちっぱなしのセメントに敷いて座った。

バックネット裏は南東に面しているうえに、アルプス・スタンドが風除けの役割をはたしていて、

ポカポカと温かい。コートの際を緩めながら、グラウンドに目をやると、金山は、ハイドランド用のものと同じ仕様の太いホースで水を撒いている。

内野と外野の分かれ目あたりに撒いた水が、風に吹かれて霧となり、外野の芝生を濡らすのを見ていて、

——この寒さに水撒きだ。ご苦労なこった。

と、思っていると、背後から声がした。

「金山くんもいい仕事をしてくれるようになりました」

振り向くと「土作りの鉄人」が金山の動きを目で追っている。

「これは、これは藤田さん。ご無沙汰しています」

例の誤審事件以来親しくしてもらっているが、十年数年前に藤田が土作りの現場から身を引いて以来の無沙汰だ。突然のことで、青山は新年の挨拶をするのを忘れている。

「無沙汰はお互い様です」

藤田も木切れを敷き、青山の脇に座った。

「あのときはお世話になりました。あれ以来、こうやって毎年お参りをさせてもらっているお陰で、無事ここまでやってくることができました」

藤田の顔を見ると反射的に思いたすのが世紀の誤審事件だ。

「それはよかった」

世紀の誤審事件とは、二十数年前の選抜大会で、二塁塁審をしていた青山が、エンタイトル・ツーベースをホームランと見誤った事件のことだ。

テレビを観ていた人はもとより、ネット裏を除く内外野の観客すべてが、左翼手の頭上を越えた打球が、ワン・バウンドしてラッキー・ゾーンに飛び込んだのを見ていたにもかかわらず、主審はもちろん、一塁と三塁の塁審もそれに気づかなかったのだ。

試合終了後、軽い疲れを感じながら戻った審判員控え室は、善後策……といってもマスコミ対応が主体だが、……を、決めかね、大騒ぎだった。

既に試合は終了している。ジャッジを訂正して、試合をその場面からもう一度などということができるとはしない。

「とにかく青山に頭を下させろ」という意見もあった。「間違いでした」と、カメラに向かって頭を下げるのは簡単なことだ。しかし、それでは、審判員そのものの存在が問われるだけだ。

「ラッキー・ゾーンに掲げられていた歴代優勝校のパネルとボールが交錯したと弁解させろ」という意見もあった。だが、誤審の原因を明らかにするのは青山の仕事ではない。第一、自分の記憶の中にあるのは、左翼手の頭上を越えラッキー・ゾーンに直接飛び込んだ打球だ。

「他の審判員も気がつかなかった」と、責任逃れをすることは可能だが、それをしたところで、自分の目で見て判断した事実は変わらない。

青山は、試合後の記者会見を、「私の目にはホームランに見えました」の一言ですませることにした。

青山が藤田大五郎から親しく声をかけられたのは、たった一言ですませた記者会見の直後だった。

「青山くん。立派な記者会見やった。人間は機械やないんやから、あれでいいんや」

「藤田さん。自分の目を信じ、ジャッジするのが私の仕事です、あれしか言いようがありません」

「高校野球は、夏の大会に参加する四千数校の中で一度も負けないのは一校しかないという事実、すなわち、勝者の影に数多の敗者ありという勝負の厳しさを学ぶのはもちろんやけど、人間としての生き様を学ぶ場でもある。人間は不完全な動物やちゆうことを知らしめ、それを受け入れさせることも大事なことや」

「高野連は教育の一環という立場です」

「教育の一環などという大げさなことなく、自分が好きなことに熱中することがどれだけ楽しいことか、そして、それは、ときにはどれだけ残酷な結果を招くかを知ってもらうだけで十分や」

「たしかにそうですね。私が審判員になったのも、野球が好きなことです。好きなことをした結果が世紀の誤審だったにしても、精一杯やった結果ですから後悔はしていません。……私が野球にのめり込むことができるのは、家族の理解があつてのことなんですがね……」

東京六大学の花形選手だった青山は、兼原バイオファームでノンプロ（社会人野球）を八年続けた後、現役を退き、高野連の審判員になった。

連盟から支給されるのは旅費と弁当だけというヴォランティア活動である高野連の審判員は、春と夏の甲子園大会の審判を担当するだけではなく、毎年、明石球場で開かれる高校の軟式野球全国大会や大阪ドームで開催される社会人日本選手権の審判を担当する他に、オフシーズンには審判員育成のための講習会で全国を飛び回る。

普通のサラリーマンである大部分の審判員は、一年に二十日ある年次休暇のすべてを高野連のため

に使うことになるので、職場と家庭の理解なくして続けるのは不可能だ。

現在、青山が務めている評議委員は、選抜大会の出場チーム選考が主な仕事だから、担当地区の決勝大会観戦のために年次休暇を使うぐらいのもので、休みが取れないという理由で家族に不義理をすることはないが、審判員をしていた二十五年間は、元旦の一家揃つての初詣が青山家唯一の家族行事らしい行事だった。

二人の娘が野球選手と結婚するのを嫌い、普通のサラリーマンと結婚し、家を離れた今、「家庭サービズしたいころに娘はなし」の状態だが、長年の罪滅ぼしの意味もあり、青山は愛妻孝行に精をだしている。

「ところで青山くん。グラランド・キーパーの控え室に神棚があるのを知っていますかな」

「知りません」

「私が生まれた二年後、この球場ができたときからあるもんや。苦しいときの神頼みではないが、こういうときに神様を拜んで気持ちの整理をするのもまんざらではない。案内するから、ついてきたまえ」

青山は、二十数年前に、初めて神棚を拜んだときのことを思い出した。

「藤田さん。あの日、神棚を拜んだときに何かが頭の中で弾けました。人間は失敗をバネにすることができる。そんな感じがしたんです」

「あの誤審事件は、ここに宿っている甲子園児の精霊が仕組んだことや。日本中が銭狂いになってゆくの危ぶんで、人間が人間を信じないで、銭を信じてどうするという問題提起やったんや」

世紀の誤審事件が起きたのは、バブルの真ただ中だった。

「甲子園児の精霊ですか？」

「ああ。成仏せずにさまよっている精霊と違って、向こうに行きはった精霊や。よく勝利の女神が微笑んだと言うたり、甲子園には魔物が棲むとか言うたりするが、甲子園にいる人は女神でも、魔物でもない。甲子園児の精霊や」

——向こうに行きはった？ 黄泉の国のことを言っているようだ。

何やら神がかった話だが、青山には、それを肯定するのはもちろん、否定する材料もない。しかし、甲子園には神がかった話が多いのも間違いない。

「……ということは、去年の夏の最後の一打は、勝利の女神が仕組んだことではなく、甲子園児の精霊の仕業だったということですか」

二〇〇九年夏の甲子園大会決勝、中京大中京対日本文理戦、日本文理の6点ビハインドで迎えた九回裏、ツー・アウトから4長短打と3四死球で5点を奪い、1点差となった後、ランナー一、三塁の場面で、日本文理の八番、若林尚希が放ったサード・ライナーのことを言っているのだ。

「そのとおりや」

「若林のバットがあと1ミリ、ボールの下側を叩いていたら、左翼線の二塁打となり、栄冠は日本文理の上に輝いていたはずですよ」

「ところが、そうはならなかった」

「甲子園児の精霊がそうさせなかったということですか。……しかし、どういう意味があったんでしようかね」

「それは、四球と二本の長打で4点差になった後に、四番の吉田が三塁ファウル・ゾーンに打ち上げた打球を中京の三塁手と捕手がお見合いし、アウトにできなかったあたりを見れば理解できる」

命拾いをした吉田が死球を得た後、日本文理に単打が続き、中京は一点差にまで迫られた。

「勝負は下駄を履くまで分らないということを知らしめたというわけですか」

「油断するな、諦めるなというメッセージと同時に、勝つとか、負けるとかということを頭から消し去り、自分を信じてプレーに専念せよというメッセージだったとわしは思う。……まあ、勝負事は多面的やから、それぞれに理解したらいいんや」

「そうですね。勝ち負けは表裏一体ですから……。ところで、ミス・ジャッジの話に戻りますが、甲子園では、あの後も、一イニング四アウトだとか、ホーム上のタッチ・プレーでの落球の見逃しだとかいろいろありましたが、高野連は、審判員の目でジャッジという方針を変えていません」

「高校野球は人間が作り出す筋のない最高のドラマや。人間が必死になってプレーし、人間が必死の覚悟でジャッジする。それでいいんや。……ところで青山くん、今回の改修の仕上げとして、野球塔が再建されるのを知っているかね」

「野球塔ですか」

「ああ。昭和九年夏にあった第二十回大会を記念して建てられ、歴代の優勝校とその選手名が銅板に刻まれていたんやけど、西宮の空襲のときに破壊された。今年できみの高野連勤務は三十五年になる。選抜の前に除幕式がある。参加したらどないや。いい思い出になるで」

「参加したいですね。……ところで藤田さん、新年早々、グラウンドとは、どういう風の吹き回しですか」

青山は、先ほどから抱いていた疑問を、ようやく口にする事ができた。

甲子園球場のできる二年前に生まれ、十四歳で甲子園のグラウンド・キーパーになり、戦前、戦中、戦後と甲子園の土を作ってきた藤田大五郎は、十年前に、「明日から土作りは金山に任す。俺は、もうここに来ない。来ると口を挟みたくなるから」と、「年寄りと釘頭は引っ込むがよし」と言わんばかりの宣言をし、引退している。

「うん。いつお迎えが来てもおかしくない年やから、一人で歩けるうちに、もう一度と思つて来てみたんですわ」

——言葉とは裏腹に、藤田さんはお元気だ。球場ができる前年に生まれたそうだから、今年で八十才か。長年、グラウンド整備で身体を苛めてきただけあつて、いまだに元気そのものだ。

「お迎えですって？ とてもそうは見えません」

十数年前と比べ、こころもち肩が小さくなり、やや背中が丸くなっているのに加え、阪神タイガースに入団したての江夏豊がグラウンドにツバしたのを見て、「土は生きものや」と叱つたというエピソードを生んだ、鼻っ柱の強さが失せ、好々爺然としているが、かくしやくたる老人という言葉がぴったりだ。

「いやいや、この年になると分かるんです」

——そういえば、去年亡くなった叔父は、死の数か月前に葬儀案内をPCに遺していた。死期を覚るというのは、実際にあることのようにだ。……こうして久しぶりに甲子園にきたということは、身体のどこが悪いのかもしれない。

「それは思い違いです」

青山は、頭をよぎった心配を打ち消すように断定した。

「年寄りの達者は春の雪やから、思い違いであつてもいいし、そうでなくともいいという心境ですわ。ちかごろ、戦場の露と消えた選手の夢をよう見るようになりましたし……景浦、沢村、吉原、嶋……」
松山商業から立教大学を経て阪神タイガースでプレーしていた景浦将、京都商業から巨人へ入った沢村栄治、巨人でプレーしていた熊本工業の吉原正喜、海草中学から明治大学へ進んだ嶋清一など戦没した甲子園児を思いだしているようだ。

「……」

思いがけず重い話になり、いささか戸惑っていると、水撒きを終えた金山が姿を現した。

「おや。誰かと思ったら藤田さんやないですか。明けましておめでとございます」

思いがけない人に金山の目が踊っている。

「新年おめでとうさん。そんなに驚かんでよろし。急に来てみたくなつたんで、あんたに案内を頼もう思つてお宅に電話したら、ここに来ていって言われたんや」

「ここにおいでになるのは、あのとき以来でしょう。何でまた」

「うん。ここが改修されるんが、ちよつと気になつてな」

「藤田さん。改修と言つても、グラウンドそのものが変わるわけではありません」

「そうや。わしも、ここに来てそれに気づいた。年を取りたくないもんや。いい加減ボケとる」

と言つて藤田が立ち上がったのを見て、

「もうお帰りですか」

金山が慌てて立ち上がった。

「ああ。グラウンドに別状ないんが分かったし……。そうや、野球塔の除幕式に青山さんも出はるそうや、そのときに、また会おう」

藤田は、見送りしそうな気配を示す金山を手で抑え、出口へ向かった。

「青山さん。女房がコーヒーを持たせてくれました。一杯いかがですか。二人分はたっぷりありますので」

藤田の後ろ姿を目で追いながら金山が言った。

「いいね」

「女房から甘いものを禁じられているんでブラックですが、いいですか」

ステンレス製のポットの蓋にはめ込まれた予備のカップにコーヒーを注いで手渡してくれた。

「私もメタボぞみでね。砂糖を禁じられている。一匙の砂糖は茶碗一杯のご飯に相当するとか言われてね」

金山が、かじかんだ手を温めるかのように、カップを両手で抱え、コーヒーを啜った。

「ところで、青山さんは高野連に三十年以上勤めておいででしょう。青山さんと甲子園との縁というか、繋がりはどういう形で始まったんですか」

「甲子園との縁か、そうだな。……私は高校のときに甲子園にでたことはない。あと一試合か二試合勝てば甲子園ということはあったがね。一番縁があるのはノンプロのときだ」

「兼原バイオファームでプレーしていたんですよね」

「うん。三十年前に休部になるまでプレーしていた。野球部は明石にあった工場に置かれていたんで、

西近畿地区の一員として都市対抗の予選を戦っていた。相手は、松下電器、新日鉄広畑、住友金属、カネカという強豪ぞろいでね。その予選が甲子園であったんだ」

「強そうな相手ですね」

「うん。ピッチャーで言えば、松下には阪急に入った山口高志、広畑には近鉄に入った神部年男と中日に入った三沢淳、カネカには阪神に入った谷村智博と甲子園の優勝投手光内数喜、住金には東京六大学で四十八勝した山中正竹がいた。地区代表になるのは至難の技だった」

懐かしい名前を口にし、青山の視線が遠くなった。

「いろいろあったようですね」

青山の視線に気づいた金山が言った。

「うん。……高校の場合、どんなに強いチームでも、夏の予選で一つ負けたら甲子園の夢は果たせないとプレッシャーがあるんだけど、ノンプロの場合、あれとは違ったプレッシャーがあるんだ」

「どういう形のもですか」

「うん。ノンプロとは、文字通り『プロではない』という意味なんだけど、給料をもらって野球をしているわけだから、都市対抗に出場できないと、社内で穀潰し扱いをされるんだ」

「穀潰しですか」

「野球で飯を食っていないという建前上、一応、仕事はしているんだがね、半人前以下の仕事しかないから、野球の結果で評価されても仕方がないところがあるんだ」

「まあ。そうですね」

「そんなことで、都市対抗の予選では味方だけでなく相手にも同じようなプレッシャーがかかるから、

1対0とか2対1といった接戦が多いんだ。……後楽園はお祭りだから楽しい思い出が多いけど、甲子園では苦しい思い出が多い」

企業が野球チームを持つのは、スポーツを振興し、社会に貢献するという建前はさることながら、企業名、あるいは、企業イメージを公衆へ浸透させるというビジネス上の目的と、会社を挙げてチームを応援することを通じ、社内における家族的雰囲気や醸成するという労務管理上の目的がある。

したが、都市対抗に出場できないチームは、目的を果たさないチームとして、会社からお荷物扱いをされ、廃部の憂き目に会う可能性が高くなるので、ノンプロ・チームにとって、社会人野球の晴れ台である都市対抗へ出場することは、存続のための最低条件だ。

都市対抗はお祭り騒ぎだが、その予選は、どのチームにとつても、生死をかけた血みどろの戦いだ。「今年負けても来年があるというような気軽なものではないということですね。……ところで都市対抗には、補強選手制度があるから、自分のチームが駄目でも、力さえあれば他のチームのユニフォームを着て後楽園にいけるでしょ」

都市対抗野球では、昭和二十五年の第二十一回大会から、同じ地区の予選で敗退したチームから五人選手を補強できるという補強選手制が実施されている。

「私は八年連続して後楽園にいったけど、ほとんどが補強選手だった。『気軽な助っ人稼業だ。楽しもうぜ』と言うドライな奴もいたけど、俺は、どことなく後ろめたいものを感じていた。野球はチーム・スポーツ。同じ釜のメシを食った仲間と苦楽を共にするのが一番だから……」

青山が、ノンプロ時代のチーム・メイトの顔を思い浮かべながら、カップの底をあげ、コーヒーを飲み干すと、「もうちょっと残っています」と言って金山がコーヒーを注いでくれた。

「ところで金山くん。さつき藤田さんが、ここには甲子園児の精霊が宿っているという話をしてくれ
たんだ。私には感じられないが、きみはどうかね」

「藤田さんは昔からそう言っていました。だから神棚を大事にしているんです。ときどき、往年の名
選手がプレーしている夢を見るときも言っていました。甲子園に深くかかるとそうなるようです。私
は未熟ですから、そういう領域に達していません」

——藤田さんは野球塔のことを言っていた。あれも甲子園児の精霊と関係があることなのだろうか。
……俺の高野連での勤務が三十五年になるとも言っていた。俺もそろそろ藤田さんの領域に近
づくころだという意味なのだろうか？